

2025年4月6日 四旬節第5主日 ヨハネ 12: 1～ 8 「キリストの香りに包まれる」

四旬節も5週目となりました。来週は聖なる七日間です。イエスさまの十字架への道も、最後の坂を上って行く事となります。けれどその前にイエスさまは再び、親しいラザロたちが暮らすベタニアで過ごされます。

この前にイエスさまがタニアに来られた理由は、11章の初めに記されています。

「ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気になるのです」と言わせた。」>

イエスさまはマリアとマルタに呼ばれ、兄弟ラザロを救うためベタニアに来られました。けれど実に不思議です。なぜこの11章2節に前もって、次の12章3節イエスさまに起こる、マリアがナルドの香油を主の足に塗った話が、すでにここで記されるのでしょうか。

それを考えるには、ヨハネによる福音書の持つ特別な点に、注目しなければなりません。イエスさまの近くに女が来て、主に油を塗ったという話は、全ての福音書に記されています。けれどその名前を、「マリア」と明記するのはヨハネだけです。他の三つの共感福音書は、すべて女と書かれています。しかもルカはヨハネ福音書と同じく、「イエスさまの足に油を塗った」とありますが、マタイとマルコは「イエスさまの頭に注ぐ」と記されています。

しかも場所が違います。マタイとマルコの福音書は、同じベタニアですが、「重い皮膚病

(規定の病) の人シモンの家」での出来事です。フランシスコ会訳聖書の註解には、「色々な理由からこの類似した二つの記述は同一の出来事に関するものではないであろう」と書かれています。

だがこれとまったく違う見方が「福音書共観表」に現わされています。短く「共観表」と呼ばれるこの書物は、福音書に多くある共通した部分「平行記事」を丁寧に分析した物です。近代の聖書学に於けるギリシャ語聖書研究の成果として、1890 年台になり登場しました。これまで聖書は、すべてが聖霊の働きによる物として、文言の研究には至りませんでした。

共観は「ともにみる」と書きます。イエスさまの御生涯を、同じ場所に立って見ていく。それぞれの聖書の言葉を分析しながら、より立体的にイエスさまのお姿を見ていくために、学問としての聖書研究がはじまりました。

佐藤研教授によって岩波書店から 2005 年に出版された同書には、187 の共通した箇所が挙げられており、その 163 番目に「塗油」として本日の聖書箇所がまとめられています。この 4 つの聖書箇所の中で、私は本日のヨハネ福音書が、一番好きです。それはヨハネだけが、ナルドの香りを聖書に書き添えているからです。香りは大切です。

花粉症で苦しむ今が、一年の中で私は最も辛い時です。何より鼻が利かず、全く香りが分からない事が辛いのです。食事も美味しくはないし、桜の花を見ても楽しくはありません。

香りは生物にとっても大切なものです。広い海から川に遡り、卵を産む魚たちは、自分の生まれた川に戻って来ます。その時彼らは生まれた川の匂いを憶えていて、香りを辿って来ると言います。狩りをする動物たちは、獲物の匂いを探し求め彷徨います。襲われる者たちは、

危険な匂いを感じるとすぐ逃げだします。また犬は人間の 1000 倍も鋭い嗅覚で、その人の
思いを正確に感じ取ることが出来ます。

同じ様に私たちも、匂いによって大きく心が動かされます。夕方にどこかの家から漂い出
すカレーの匂いに、懐かしく幸せな子ども時代を思い出します。私はまだ幼い頃ひどい小児
喘息でした。発作で息が出来なくなると、両親が病院に連れて行ってくれます。そこで注射
して貰うと、嘘のように楽になります。けれどいつの間にか、病院の消毒の匂いを嗅ぐだけ
で、心が安らぐようになりました。

私は匂いに過敏なのかも知れません。タバコの臭いと線香の匂いを嗅ぐと苦しくなります。
それとは逆に心が安まる匂いがあります。それは言葉では説明できません。ただある共通で
感じます。それは今まで、人が祈ってきた場所にだけ漂います。

突然に「あ、ここで誰かがお祈りしていた」そう感じるのです。ルーテル学院大学の 105
教室も、講義を受けているといつも、チャペルにいるような香りを感じます。サック先生に
お聞きしたら、そこは毎週日曜日に英語礼拝をする場所でした。

このように生きている教会にはどこもみな、イエス・キリストの香りが漂います。私たち
はその、イエス・キリストの香りを浴びて、胸いっぱいキリストの香りを吸い込むために、
教会に集まります。

本日の聖書の箇所が、私たちにとって何よりも大切なのは、イエス・キリストの香りが、
聖書の中から漂い出すからです。これに抗議するイスカリオテのユダには、このキリストの
香りは、耐えがたく辛い物だったに違いありません。

香りは直接、心に響きます。罪を犯しイエスさまを裏切ったユダにとって、キリストの香りはどれほどに苦い物でしょう。物事をすべて金に置き換えて、人の心を顧みない者が犯す愚かな過ちと、今私たちはリアルに向き合っています。

これこそが本当の、アンチ・キリストです。金は世にある物の中でも、一番溶けにくい金属です。だから匂いもしない筈。だが世には金の匂いが大好きな、悪魔という獣がいます。

しかしイエス・キリストの香りを、悪魔は何より嫌います。ですから私たちは、イエスさまから戴いたこのキリストの香りを携えて、教会から世に派遣されて行きます。そしてどこでも主に祈る事により、聖霊の風が吹いて、イエス・キリストの香りが立ち上ります。

今日はインターネットを使った礼拝です。残念ながら聖餐式も行う事が出来ず、私は礼拝堂で共に讃美歌を歌い、共に祈る事も叶いません。けれどそれぞれの場所で祈る事により、イエス・キリストの香りが、私たちを一つに繋いでくださる事を信じます。

聖霊の導きを信じて、ともに主に従って参りましょう。

人知では到底計り知ることの出来ない神の平安が、キリスト・イエスにあって、あなたがたの心と思いとを守られますように。アーメン